

磨ルと碾キにて輾ルるとは殊ニながらレどカら誤ル 抹キとなるは似たり、古法は是を煮クたるなり、磨をも今は挽とのみいひてするといはず、昔はすり茶といへり、犬筑波集活字 すぎの衆あづまの旅におもひきてたづぬやすり茶つぼのいしぶみ、稻のもみをば今もするといへり、

茶を磨ルこと、むかしよりおろそかなり、多くはあるじの留主に、挽するならひなれば、手づから磨ことはいと稀なり、俳諧埋木、また留守をして茶臼ひけとや、續山井、松風の音や茶をひく神の留主、後撰夷曲集、口切の會を催す十月は神の留主、まづ茶をひいつなり、俳諧染糸、殊の外ねごきは留主もたのみがた、茶はとにかくに自身ひくべし、古き前旬付に、春に成けりく、唯あてもねぶりきよの茶ひき坊、多くは茶ひき坊は盲人なり、茶は手づから點るにあらずや、然らば磨も手づからすべき事なるべし、

〔人倫訓蒙圖彙〕四挽茶屋 宇治茶を挽て商所々にあり、